



日蓮聖人の宗教と價值的批判

結 城 瑞 光

時代の進歩は「Ve bessernig」となり、舊套の因襲を破壊して人類共存への開放は福祉の爲に社會關係の規律を研究して健全なる社會的要素の發達を促して居るのである、從來社會學的研究の失敗は科學の歸納綜合なる哲學的基礎の閑却に因る、劇烈なる生存競争に於て敗殘者となるのは不徹底な社會組織に依るのである、ブルジョアから見た社會は「Trunkenthet」（睡眠時酩酊状態）な感がある事と思ふ、人生の本質、生活の價値……嗚呼我等は何處にか安住處を求めたのであらふ、科學は實理哲學へ而して完成せる實生活の内容に、眞の生命の焰に燃て微妙のメロディを聴く時純にして清高なる世界は創造されるのである。

愚鈍闇冥なりし原始時代に於て未だ多くの經驗を有せざりし人間の頭惱に自然界の現象は恐畏疑惑の影を投げた、幼稚ながら世界の原質を哲學的問題として政究した彼等は感性より悟性へ、理性の衝動は無限の欲求に向ひて已性の特徴を發揮して論理的に組織的に統一的性情に原いて之を説明せんとしたのである、換言すれば社會的組織の複雑さは部分的及び統一的解釋によつて自然的に科學哲學の發生となり與へられただけの形の上では満足は出來なくて實在を認識し、理想を現實化せうとした要求は漸次科學哲學の諸問題を惹起し宇宙萬物の成生を明瞭ならしめんとしたのである。

箇性の發輝が科學的智識となれば吾人の客視的事象の部分的研究となり其の考察は證明となつて宇哲森羅三千の本体を合理的に説明する事になる、然し乍ら人間の欲求は眞善美の理想境にある、本能的満足か充溢

するものなれば智識の及ばざる總合的問題即ち經驗か超越した根本的の原則を思惟し觀察する事が能る其は哲學の頭分である、既に科學者が斷えざる批判と絶えざる疑問とを以て研究しても材料は無盡である、故に彼等は不斷の努力に於てのみ彼自身の生命を見出すのである、然し冷性なる理性にのみ其の生涯を委ぬるならば余りに寂莫であり無趣味ではないか、暖き自然界の微妙なる働を体顯する時宗教的情操の春の芽生えは訪れる事であらふ、凡て人間としては盡く哲學的問題を有する以上詩歌の音樂に或は又勞働に人間味を味識する事ができるのである、近世の大科學者アイザック、ニュートン (Isaac Newton) 一六四三—一七二七 も宇宙を造つた神の力を讚嘆して居る、若しも科學的智識に於ける社會觀ならば極めて偏重であり頗る狹義である、ニュートンの宇宙引力説は數學と力學とを以て天体の複雑な運動を解結し、光の本性に就ても微粒子説さへも唱えたのであるが、科學の世界は纖細な數理の寵兒を養ひつゝあるから、此のニュートンの説をば根底から改造したアンシユタインと云ふ二十世期の産んだ寵兒がある、彼は吾人の認める宇宙の時空は有限であるとし機械的論證で宇宙の擴さは直經三鏡光年の範圍を出ないと斷定したのである。宇宙は既に相對的であると發見した彼は物質のみの學者であるとする時は未だ彼の人生觀を満足に表現したとは云えないのである、彼の根本問題は吾人の認識問題の全線に解れてゐるのである、其れは四次空間の曲線の交り即ち物と物との直接交渉の時其れ自身絶對であるとし其れは時空に依るものでない、即ち吾人の直接經驗は物理的法則であり絶對の存在である、座標の相對關係によつて消失するもので無いとしたのである、相對性原理の説明は専門家に譲るとしてアインシュタインの場合、デカルトの *Cogito ergo sum* (吾思故吾在) の絶對の存在は誰も否定し得ぬ真理とした如くアインシュタインの絶對存在も誰も否定し得ぬ筈である。然し科學の使命は何等かの座標を持つて居る限り、其れ自身の價値を相對性の上に所有してゐるのである、今は吾人の直接經驗による絶對其のものは獨り宗教と藝術との世界でなければならぬ、而も彼自身の内的生活は至つて感情的生活の基調に立つてゐる事は、希臘の悲劇詩ソフォクレスの詩篇中でアンチゴニヤが叫んだ告白を彼の生活としてゐる點でも解るのである、彼等科學者も其の目的は現象界と本体界との研究を一括して、價値と議論的研究とに於て總合

統一し矛盾の無い世界觀人生觀を作り出さうとしたのである、此境涯は宗教藝術の舞臺である。

社會の進歩は科學的分析解剖によりて部分的智識を得ることも、之を統一的原理によりて一大活力の發現をせねばならぬ、然ば此の一大活力とは何ぞと云ふに、哲學と科學とを包容して完全せる社會的生活の所謂文化的社會を提出する要素である、此の要素とは健全なる宗教の信仰である、何程精密なる科學研究も、深遠なる思想哲理でも實際的に無價値なものが多く、其れは吾人の生活に於て無意識の場合に微妙なる作用で冷細なる印象或は其れに依つて刺戟を受けて働く感情、之等は嚴正なる智識の所定を肯定しない事がある、言はば死者に對する智的解釋は生理的に枯死したものとするが、一般感情の上からは哲學的見解を超越して遷滅無常の觀念から同情衷愁或は頓悟直覺を體現する事がある、人生の複雑なる哲學に於ては到底解決する事が能ない、従つて何物か力強い救済に攝取されねばならぬ、而して自己の安全を保證する事を熱望するのである、此の宗教意識の發現は理想の實行と表れ自己の行路を照すに智識を以てするに到るのである、即ち此の信仰の對照たる神の存在を認識し歎美渴仰する精神が人生の缺陷を厭忌して宇宙の根底歸趣に絶る感情が宗教の欲求となるのである。

日蓮聖人の信仰へ

畏縮！苦惱！の反響は絶對威力に對する信頼となり信頼は歡喜の精神となつた小我の自己は大我の生命に抱括されて、茲に偉大なる價値の生活、換言すれば人間が自己生命の源泉に觸れて人性の中に神性を發揮する精神状態即ち靈格的人格となる事である。然し此の宗教意識の定義は從來不同であつたが、神を畏敬し信順して之に伴ふ道德を實行する感情を根本とした所は同様である、但し此の絶對依憑に對する方法に主客の二觀である、身體機制を支配し感情を養ふ行法となつて現れる事は一律であるが、他力的宗教即ち身體は假現である本體世界の生活こそ理想の世界であると社會生活の意義を非定する客觀的宗教もあれば、冥合や神祕統一の内感性を自己身體に實現する主觀的信仰もある、要するに宗教心の發現は自己以上の偉大なる力に

よつて自己の不滅を如實にするのが目的である、次に起る問題に必然的に宗教の選擇てふ事である、思想風教を異にした民衆は都て同一なる信仰を持つ事は困難であるが同一宗教に統一される可能性は確にあるべきである、世界の二大宗教たる佛耶二教の比較に於て既に明かである、基督教の本質は神に絶対信賴する他力教である、佛教でも教義が廣汎な爲に他力の義分もあるが、總じて釋尊の究竟證信即ち凡佛一如の意識状態を宗教の生命とするからには自力教である、然し實際に於て社會全體の根本宗教は自他何ぞと云ふ重大問題に及ぶのである、從て文化生活の規範を確定する事になる、故に其の信仰の釋解を根本的にする事が必要である、信仰の意義は極めて廣義であるが、其の本質は宗教上の信仰にあるは言を俟たぬのである、心理學者のジエームスは理論的不安の一切掃蕩された心的状態と云つてゐる、猶哲學辭書に載せた三義を見れば、

A 實在の直接認識

B 吾人の認識を超越する絶對若くは超越世界に關する直接認識

C 理論的説明の不可能なる原理の直観

此の三義は信仰の定義の諸説であるが、之を總合した原則を作れば現實を超越した活力のある實在の認識である、從來信仰の基調は感情にありと思考されたが完全の信仰は智情意の三要素より成立されるもので智情意全體の合理的活動である、科學哲學に對しては感情が中心となることも宗教其れ自身にあつては眞善美の三要素が圓滿に活動して宗教の本義を盡すのである、之等信仰中に於ても前述の如く比較的智的方面が多分に含蓄される自力教もあり、情的方面の勝れた他力教もある、然し自他二教が統一されて矛盾のない世界及び人生が創造されるならば眞の宗教の價值が定るのである、オイケンの宗教に對する出發點は、人生に於ける烈しき矛盾の感と人心の要求と現實との衝突の感とであると云ふ見解も此の眞理を物語るものである、若し此の矛盾と衝突とを避けしめ融和と光明とを授くるものが有るとすれば前述の如く圓滿なる解結を見るのである、聖日蓮の哲理的宗教の信仰は本體世界を本佛の生命全體とし之を認識し渴仰する時は迷情の凡夫は既に本佛の妙智を體得して現實世界は本體世界となる之を佛陀の究竟的證信たる事の一念三千と稱するので

ある、此の超越世界を現實化する信仰は人格完成の活力たる五玄具足の題目に依りて實現されるのである、此の時主客二觀即ち自他力の信憑は綜合統一されて現實化し其の福音も已利的に限らず社會的となつて價値的生活を實現し人生本來の欲求たる文化的生活を體顯されたのが吾日蓮聖人の宗教である。



信仰の寸心を改めよ

志 村 皓 堂

立正安國論を繙く時、其の終り謗法對治の催促を結する一段に此の語を拜し得らるゝ。吾人が信仰に生きねばならぬことは、古くして而かも新らしい問題である、何れの國何れの處に於ても、信仰を無視して生きんとするものありとせば、由々敷一大事と云はねばならぬ、何となれば宗教は吾人の生活上に於ける關係が極めて大であること云ふよりも、寧ろ極めて根本的であるからである。此の宗教は如何なる時代如何なる國家にも甚深の影響を與へて居つて、人が數人以上集まつて生活を共にする其處には、自然的必然的に宗教は存在せねばならぬのである、故に之を無視せんとしても許さない、と云ふよりも自ら無視し拋棄し得ない先天的約束を持ち來つて來る。

元來吾人は孤々の聲と共にそれが人である限り、宗教心を附與され之を包藏して居るのである。寸心の語は列子の「嘻吾れ子が心を見るに方寸の地虚一矣」とある此等から出て居るが、此の寸心の中には善、惡、無記の悉くが藏せられて一つも欠けては居らぬ、社會組織の要素も破壊の素因も、而して世界の耳目を驚かす何ものをも持つて居る、と同時に宗教心を欠いて居るものはない筈である、然るに此の宗教心が總ての事業に生命あらしめ意義あらしめんとして、心の奥底に躍動して居るに拘らず、之が吾人生活上に直接關係なき